

駿河国侵攻

勢力を失う「今川氏」

1560年の桶狭間の戦いで、今川義元が尾張国の織田信長に討たれると、今川氏真は、父・義元の政策を引き継ぎ、戦乱により不安定となった領国^{※1}の立て直しを図りました。

しかし、離反^{※2}する家臣が現れ、今川氏は勢力を失い始めました。

三河国・岡崎城の松平元康(後の徳川家康)も今川氏から独立し、1562年に信長と同盟を結び、1566年に三河国の統一を果たしました。

※1 戦国大名が実力で支配した国

※2 裏切り離れること

三国同盟の破綻

今川氏の勢力が衰えるなか、甲斐国の武田信玄は、今川氏の領国・駿河国への侵攻を企てました。これにより、駿甲相三国同盟[※]が破綻しました。

1568年2月、信玄と徳川家康は、「同時に今川氏を攻撃し、今川氏の領国を分け合う」という密約を交わしました。

※1554年に今川氏・北条氏・武田氏の3者が「互いの領地を侵攻しないこと」「要請に応じて軍事的に協力すること」を約束したものを

徳川家康が三河国を統一した頃の勢力図と同盟関係



信玄の駿河国侵攻

1568年12月、甲府を拠点とする武田信玄は、駿河国への侵攻を始めました。

そのため、北条氏は今川氏に軍事的な支援を行いました。

重要拠点「大宮」

甲府と駿府を結ぶ主要道路には、駿州往還と中道往還(甲州街道)があり、この2つの道路は、大宮付近で接近していました。

大宮は、駿河国侵攻において、安全に甲府に戻るための重要な拠点となっていたため、信玄は、大宮城(大宮小学校周辺)を攻め落そうとしました。



大宮城の抵抗

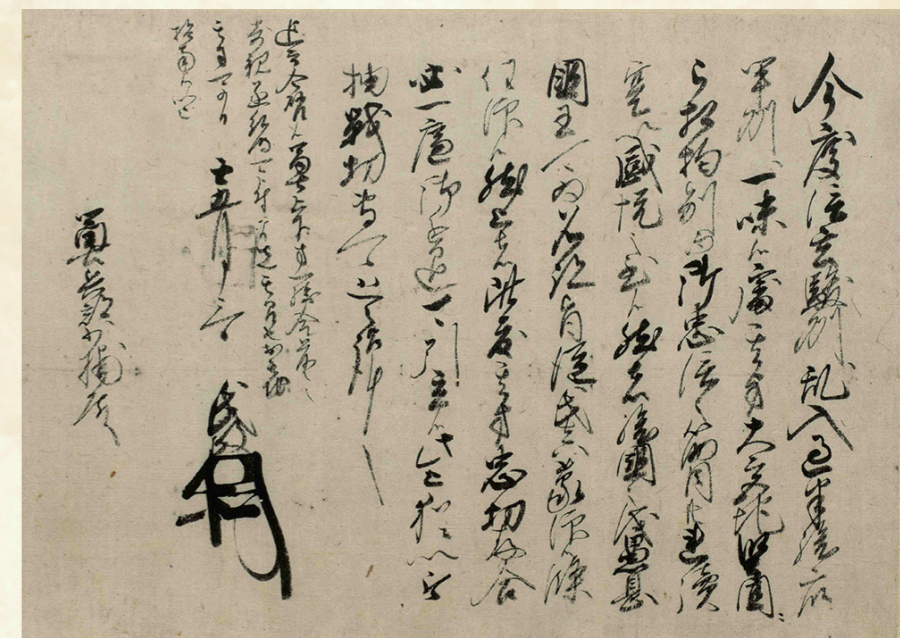
今川氏の家臣であり大宮城を拠点とする富士氏は、大宮城を攻撃する武田氏に対し、北条氏の支援を受けて徹底して戦う姿勢を見せました。

富士信忠と子・信通は、1568年12月と1569年2月に攻撃された際、大宮城に立てこもり武田氏の軍勢を撃退しました。

北条氏康の子・氏政は、大宮城の戦いで信忠が活躍したことを「北条氏政書状」で讃えています。

書状には、「信玄が駿州に乱入した際、信忠は大宮の地を堅く守った。忠節[※]を賞し、今後は北条氏が富士氏を引き立てることを約束する。そして、更なる戦功を期待する。」と書かれています。

※主君への忠義を固く守ろうとする気持ち



▲北条氏政書状(1569年5月3日/静岡県立中央図書館蔵)

どうなる家康 「今川氏からの独立」 —駿河国侵攻の頃の家康—



20歳
尾張国を侵攻しようとした今川義元が、1560年の桶狭間の戦いで織田信長に討たれると、今川軍は駿河に逃げました。大高城を守っていた元康は、岡崎の大樹寺[※]に撤退しました。
※松平家の菩提寺

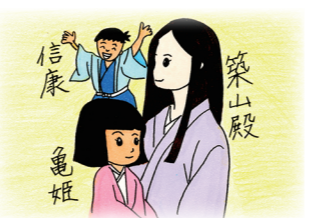


22歳
三河国・岡崎城でも、今川氏の役人が引き上げました。元康は、もめけの殿となった岡崎城に入り、生まれ故郷に念願の帰還を果たしました。



23歳頃
今川氏から完全に独立した元康は、義元からもらった「元」の字を捨て、1563年「家康」に改名しました。このころ、特権を守ろうとする寺院が、大規模な一向一揆を起こしました。

※清州同盟といわれる



28歳
家康は、一向一揆を制圧すると、三河国の今川氏の城を次々に攻め落としました。1566年、三河国を統一し、徳川へ改姓しました。家康は、三河国の戦国大名となりました。

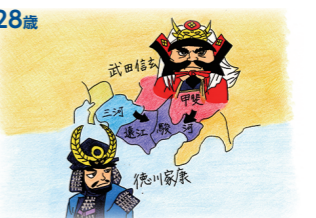
どうなる家康 「三河一國を支配」 —駿河国侵攻の頃の家康—



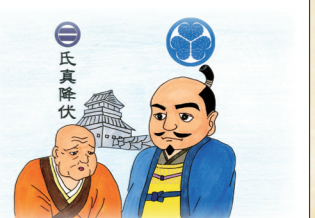
23歳頃
今川氏から完全に独立した元康は、義元からもらった「元」の字を捨て、1563年「家康」に改名しました。このころ、特権を守ろうとする寺院が、大規模な一向一揆を起こしました。



28歳
1568年、家康は甲斐国・武田信玄と今川氏の領国を分け合うという密約を交わし、信玄は駿河国を、家康は遠江国を同時に攻撃しました。



家康は、遠江国・掛川城に逃れた今川氏真を包囲しました。その後、家康が氏真に和睦を持ち掛けると、1569年、氏真は降伏し、掛川城が家康に明け渡されました。



家康は、遠江国・掛川城に逃れた今川氏真を包囲しました。その後、家康が氏真に和睦を持ち掛けると、1569年、氏真は降伏し、掛川城が家康に明け渡されました。

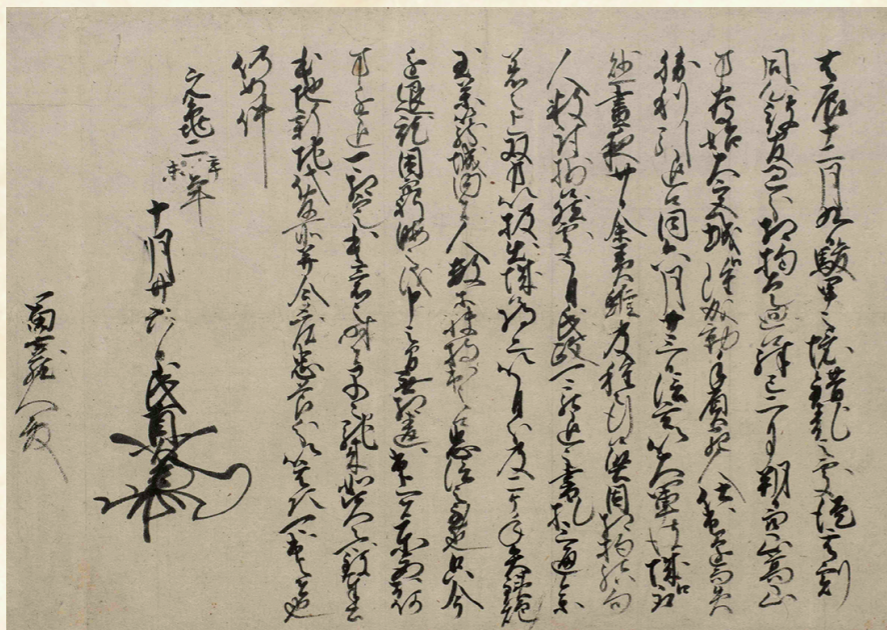
駿河国侵攻

大宮城の降伏

1569年6月、武田信玄は自ら大軍を率いて大宮城に3回目の攻撃を仕掛けました。信玄は、さまざまな手段で昼夜20日間程攻め続けました。堅く城を守り抜いてきた富士信忠と信通は、ついに城を守りきれなくなりました。

北条氏政の勧めもあり、信忠は7月に降伏し、武田氏に大宮城を明け渡しました。

信忠は、蒲原城(静岡市清水区)で北条氏方として武田氏に対抗しましたが、蒲原城は落とされました。信忠は、氏政から伊豆国・河津に居住地を与えられ、武田氏に仕えるまでそこで過ごしました。



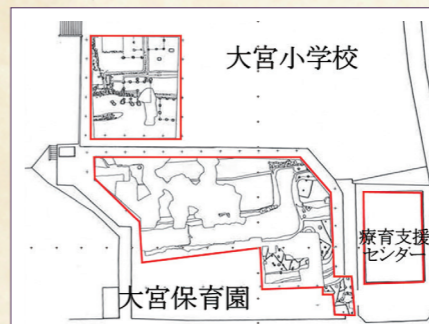
▲今川氏真判物(1571年10月26日/静岡県立中央図書館蔵)

ゆかりの地



神田蔵屋敷稲荷神社

戦国時代、大宮小学校周辺にあった大宮城の蔵屋敷に祀られた稲荷神社といわれる。



発見された大宮城跡

周辺に大宮城があったとされ、昭和59年から5回発掘調査が行われた。



上空写真

今川氏からの離脱

北条氏政は、父・氏康の死後、武田氏との同盟を復活させました(甲相同盟)。

これにより、駿河国を武田氏が制圧したため、富士氏は、元の領地での復帰ができなくなりました。

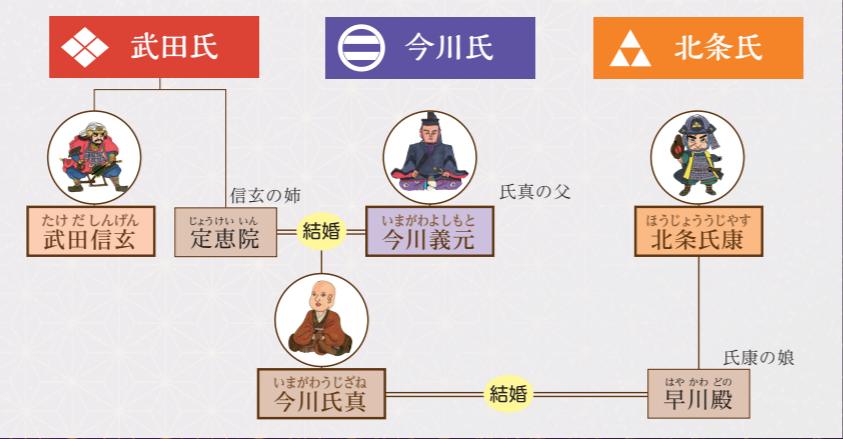
富士信通は、暇乞いをして、今川氏の元を離れる許可を求めました。それに対し氏真は、「今川氏真判物」を出し返答しました。

判物には、信玄が駿河国へ侵攻を始めた時から、今川氏に一貫して忠節を尽くした富士氏に対する感謝や、武田氏の攻撃を防いだことなどに対する功績を「忠信之至である」と讃えています。

また、「東西どこへ行ったとしても、自分(氏真)が駿河国を奪い返したときには、すぐに駆け付けてまた仕えてほしい。」と書かれています。

今川氏最後の当主「今川氏真」

<p>1538年 今川義元と武田信玄の姉・定恵院との間に生まれました。</p>	<p>1568年 信玄と徳川家康が密約を交わしたにより、信玄に駿河国を、家康に遠江国を攻撃されました。駿府にいた氏真は、清見寺(静岡市清水区)で、武田氏の軍勢を薩埵峠で迎え撃とうとしました。しかし、家臣の離反が相次ぎ、遠江国・掛川城(掛川市)に逃れました。その後、掛川城は、家康によって包囲されました。</p>
<p>1554年 今川氏・武田氏・北条氏が結んだ「駿甲相三国同盟」により、北条氏康の娘・早川殿と結婚しました。</p>	<p>1558年 今川氏の第12代当主となり、領国経営を行いました。</p>
<p>1560年 桶狭間の戦いで父・義元が織田信長に討たれると、しだいに今川氏の支配は不安定となりました。</p>	<p>1569年 氏真は降伏し、家康に掛川城を明け渡すと、妻の実家・北条氏を頼り小田原に落ち延びました。こうして戦国大名「今川氏」は、滅亡しました。</p>



浅間大社東側にあった「大宮城」

大宮城は、浅間大社の大宮司^{※1}を務めた富士氏が拠点とした場所で、富士城ともいわれます。

1561年、今川氏真は、浅間大社の東側にあった大宮城に城代^{※2}として富士信忠を置きました。当時の大宮城は、周りを堀で囲み、土塁^{※3}を作って守りを固めていました。

大宮城の戦いで降伏した信忠から武田氏に大宮城が明け渡されると、大規模な改修が行われました。

武田信玄は、大宮を拠点に北条氏と蒲原城などで戦いを繰り広げました。

武田氏が織田氏の攻撃を受けると、大宮城は織田氏と同盟を結ぶ北条氏によって焼かれました。

大宮城跡からは、多くのかわらけ^{※4}や、雁股鍬^{※5}などが発掘されています。

- ※1 神社の役職で神職の長
- ※2 城主の代わりに城を管理する者
- ※3 敵の侵入を防ぐために盛り土などで築いた堤防状の防壁
- ※4 儀式やもてなしなどで使われた素焼きの土器
- ※5 先端が2つに分かれた内側に刃の付いた武器



かわらけ



雁股鍬